『紫式部日記』の成立

――献上本・私家本二段階成立の可能性――

山本淳子

はじめに―問題の所在
一　前半記録体の「女房日記」性
二　消息体の問題
　1　前半記録体との連続性
　2　前半記録体との相反
　3　二段階成立の可能性
三　主家賛美と自己語りの問題
　1　書き換えがもたらした二重主題
　2　現行冒頭以前の部分
四　「私家本」の制作
　1　制作の意味
　2　「私家本」の読者

『**紫式部日記**』は、謎を多く抱えた作品である。全体は四つの部分から構成されるが、各部の関係は明確でない。内容は主家賛美と自己省察という公私二極にわたり、どちらを主なテーマとするかが判然としない。また盛り込まれた情報には、世間への公開、あるいは主家への報告に適したものがある一方、主家女房への批判など厳に秘すべきものも存在する。さらに外部資料によれば、この日記にはかつて現存冒頭以前の記事があったようである。本論では、こうした錯綜した現状を、現存本の**成立事情**に由来するものと考えた。即ち『紫式部日記』は、当初彰子の第一子出産を中心記事とする「**献上本**」が書かれ、主家に献上された。だがその後、娘賢子の彰子への出仕を控えて紫式部が「**私家本**」を作成、「献上本」の公的内容に加え、自らの思い、後宮の抱える諸問題、人々の情報などを盛り込んだ。その際冒頭以前に付加した記事がやがて脱落したのが、現行の作品だとの見解である。

はじめに―問題の所在

『紫式部日記』は、読解に強い困難を感じさせる作品である。それは次のような状況による。

現存する『紫式部日記』は、すべての写本・版本において、左の四部分から構成される。

① 前半記録体部分　冒頭の寛弘五年秋から、寛弘六年正月三日までの詳細な記録

② 消息体部分　「このついでに」に始まる手紙文体部分

③ 年次不明部分　年月日を明記されない、二、三の断片的エピソード

④ 後半記録体部分　寛弘七年元日から正月十五日までの記録

問題は先ず、②の消息体の存在である。他の部分が概ね時系列に沿い出来事を記す記録文体であるのに対し、この部分は文末に謙譲語「侍り」を頻用する手紙のような文体で記され、末尾は挨拶文で綴じている。この、記録とは内容も形式も明らかに異質な部分は何なのか。[1]

次に③の年次不明部分は、消息体が挨拶を以て一応終了した後に、唐突に「十一日の暁」と始まる。年と月は記されない。二つまたは三つのエピソードから成るようであるが、第二以下のエピソードにおいては、年月日すべてが記されない。それぞれの記事の関連も、関連の有無自体を含め不明である。いつの記事であるか、後人の手により混入したものか、紫式部が意図的にこの形でここに置いたものかについて、様々の説が提出されてきた。[2]

また④の後半記録体部分は、寛弘七年正月記事であることが明記されており、①の前半記録体に一見似ている。が、記録する姿勢に明らかな違いがある。末尾は、現行冒頭がいかにも冒頭らしく改まった印象を与えるのに対し、巻末というはっきりした印象に欠けていて、呼応しない。それらからこの箇所についても、混入か意図的布置か、意図的ならばその意図は何かが問われてきた。

また『紫式部日記』には、次のような外部資料がある。

A　藤原定家の『明月記』（貞永二年三月二十日）

式子内親王筆月次絵の話題の中で、五月の絵についての注に「紫式部日記暁景気」と記す。

B　『紫式部集』「日記歌」　家集古本系諸本の巻末に付加された後人作資料。『紫式部日記』から、紫式部詠で家集に採られていないものを抜き出し、詠歌事情を詞書として書き添えたものと考えられている。

C　『栄花物語』（巻八）　寛弘五年の記述にあたり『紫式部日記』を主な取材源とする。記事は取捨選択

されて、文面も書き換えられているが、時にほぼそのまま引用することもある。

ここでの問題は、「五月」の記事の存在である。現行『紫式部日記』には、五月にあたる記事は無い。だがAの『明月記』は、紫式部日記の五月の暁の場面が絵に描かれたと記している。またBの「日記歌」にも、寛弘五年五月土御門殿法華講でのものとして、紫式部と同僚女房たちの贈答が収められている。いっぽうCの『栄華物語』にも寛弘五年五月法華講の記事があり、そこには「日記歌」と重なる特徴的な表現が見受けられる。[3] つまり外部資料によると、『紫式部日記』には寛弘五年五月の記事があったことになる。現行冒頭は同年秋のことであるから、記録体が時系列を守る限り、その記事は現行冒頭以前に置かれていたはずである。したがって現行の形は、五月記事を含む現行冒頭以前の部分が脱落したものということになる（首欠説）。しかし、現行冒頭「秋のけはひ入り立つままに」はいかにも一つの作品の冒頭らしく、これ以外の冒頭があったとは考えにくい。

『紫式部日記』において、もう一つ大きな問題は、その主題である。これは、『紫式部日記』とは何かという問に置き換えることもできるだろう。『紫式部日記』は紫式部が仕える彰子の第一子、しかも皇子誕生という主家の慶事を題材としており、主家賛美を主題とする「女房日記」[4]的な傾向を極めて濃厚に持っている。ところがその記事の中には、特に前半記録体において、主家の繁栄とは直接関わりそうにない紫式部個人の厭世感や、女房生活への違和感を記した、「憂愁叙述」と呼ばれる部分が度々現れる。それらは、紫式部が自己の内部を覗きこみ、その苦悩を文章に刻み込んだもののように思える。一体『紫式部日記』は主家のための「女房日記」であるのか、個としての「自照文学」であるのか。

これらの問題は、『紫式部日記』が日記文学として論の俎上に載せられる度に、繰り返し論じられて来たところである。問題は多く、錯綜しているように見える。しかし稿者は、これらを個別ではなく一体的な問題と考えている。本稿ではその解明の第一歩として、前半記録体と消息体の関係、二つの主題が存在する理由、冒頭部と散逸五月部分の事情を中心に、詳しく考えてゆきたい。なお、このことについては拙著『紫式部日記』[5]解説Ⅳ「『紫式部日記』の構成と成立」でも論じており、重なる部分も多いことを、あらかじめ申し添えておく。

一　前半記録体の「女房日記」性

前半記録体が「女房日記」を基体とすることは、現行冒

頭文に最も明瞭に現れている。

秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

別稿でも触れたが[6]、この文章は自然美の描写のように見えて、そうではない。書き出しの「秋」とは、彰子出産の季節のことである。出産予定日は九月、晩秋にあたる。「秋のけはひ入り立つままに」とは、主家にとって待ちに待った時が、今や訪れんとしていることをいう。道長が支配する土御門殿の庭では、見上げれば池の畔に並び立つ高木のこずえの葉が、地に目をやればせせらぎの岸辺の草むらが、そのことを伝えている。加えて、「おほかたの空」というからには天さえも、秋晴れの青、夕焼けの赤という艶なる色彩で、秋の到来を教えている。そしてそれら自然に引きたてられるのが、「不断の御読経」である。安産祈願という人事は自然の応援を得て、いっそう緊迫と切実の感を募らせる。この文章の土御門殿空間は、人と自然が心を一つにして皇子誕生を待つ小宇宙として描かれている。

さらに構成の面にも、作者の意図が看取できる。冒頭から彰子の出産場面までの間、言わばアプローチの部分で、作品は主家の人々を一人一人紹介している。それだけでも主家が主役であることは明瞭だろう。だがそれに加えて、紹介されるそれぞれの横顔が、見事なまでに主役一家として〈あるべき姿〉である。

まず彰子は、「悩ましうおはしますべかめるを、さりげなくもて隠させ給へる御有様」である。臨月間近、体の大儀さはもちろんのことだが、その上にこの時の彰子は別の苦を抱えていた。一条天皇に十二歳で入内以来九年、ようやく初めての懐妊にたどり着いた、だが今度は男子出産という大任を果たさなくてはならない。しかしそうした重圧を、彰子はさりげなく隠している。そのことが紫式部を「憂き世の慰めにはかかる御前をこそ尋ね参るべかりけれと、現し心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるる」までに感動させる。自分自身も人生の苦を負っていた紫式部は、同じように苦を抱える彰子の健気さに触れ、人間として共感と尊敬の念を抱いたのだ。このように彰子は、女性として最高の身分にありながら、人として女としての苦を知り、しかもそれに屈することも乱れることもない精神性の持ち主と紹介されている[7]。

次いで道長は、朝霧の中、「御随身召して遣水払はせ給

ふ」姿である。朝廷から特に与えられた「随身」を庭の清掃に当たらせる威風、自ら邸内を管理する厳格さ。邸内の整備は家の盛衰を如実に表すので、細心の注意を払っているのだ。渡殿の局に紫式部を見るや、女郎花を差し入れ「これ。遅くてはわろからむ」と詠歌を求める。紫式部が詠むと「あな、疾」と微笑む。女房を試し、評価する態度である。彼は堂々たる権力者であると共に、そこに油断せず、監督と指導を怠らぬ当主と描かれる。

次の頼道は、時にまだ十七歳。だが「年のほどよりは、いとおとなしく、心にくきさま」で「をさなしと人のあなづり聞こゆるこそ悪しけれと、恥づかしげに」見えるとされる。紫式部と「宰相の君」との雑談に交わり、恋の話などをしみじみと口にしたかと思うと「多かる野辺に」と誦じて立ち去る。「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をやたちなむ（古今集・秋上・小野美材）」の一節である。父と同じ女郎花を素材にしつつ、こちらは年齢に相応しく、清新な雅の風情を漂わせる。

また、やがて親王の乳母となる「宰相の君」は、昼寝姿を紫式部に見とがめられ「絵に描きたるものの姫君」「物語の女」と褒められる。まさに物語の作り手である紫式部の言葉ゆえに、最高の賛辞というリアリティが感じられる。そして彰子の母、源倫子は、紫式部に重陽の菊の露を「いとよう老い拭ひ捨て給へ」と取り分けてくれる、心遣いの人として紹介されるのである。

このように開巻から、自然と人が一体となって慶事を待ちかねる主家邸を描き、その主人一家一人一人の理想的な在りようを描く手法は、主家賛美を目的とする「女房日記」に実に適わしい。

これ以外にも、前半記録体は「女房日記」的な視点と表現に満ちている。例えば紫式部は、公卿たち、女房たち、下仕えの者たちに至るまで、登場人物を主家の慶事との遠近によって描き分けている。道長に近い公卿はその官途上昇に向けて道が開けたという顔、遠い公卿は各自の思惑を抱いた顔が記される。女房たちについては、主家のためにどれだけ心を砕いているかが鋭く描かれる。詳細な装束描写はその一端である。また下仕えたちは世間の声の代表者ととらえられ、新生の皇子を「世の中の光」と待ち望んでいたと言う役[8]を与えられている。どれも主家を主役とし、女房の立場からその栄を賛美する「女房日記」的性格の表れにほかならない。前半記録体は、主家が下命し紫式部がそれに応えて作成した「女房日記」を基体とすると言ってよい。

二　消息体の問題

1　前半記録体との連続性

前半記録体は、寛弘六年正月三日の場面で

　このついでに、人のかたちを語り聞こえさせば、物言ひさがなくやはべるべき。

なる一文により、消息体に引き継がれる。

消息体が実際の手紙の紛れこみであるという「竄入説」に対して、手紙ではないとする「書簡体仮託説」が優勢である理由の一つは、前半記録体から消息体への移行があまりにも滑らかであることである。確かに、別のものが入り込んだという違和感がない。というよりも、前半記録体と消息体は地続きと言ってよい。その様子を確認したい。

前半記録体が終わりにさしかかる寛弘六年正月、内裏では三日に敦成親王の戴餅が行われた。また正月恒例の行事として、一日から三日までの毎日、彰子が屠蘇を飲む「御薬の儀」が行われたが、当年の給仕役は女房大納言の君であった。『日記』は先ずその二つの事実を記した後、三日間の「御薬の儀」における大納言の君の装束を列挙する。次に、三日の戴餅の描写に移行し、親王の乳母宰相の君の装束を記す。その末尾には次のようにある。

　いとをかしげに髪などもつねよりつくろひまして、やうだいもてなし、らうらうしくをかし。丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひをかしげなり。

第一文は「つねよりつくろひまして」とあるので、正月三日という特定の日の様子である。しかし第二文が述べる彼女の身長・肉付き・顔立ちという内容は、この日に限定されることではない。記録から批評へという筆の逸れは、ここから緩やかに始まっているのである。

『日記』はこの後、話題を大納言の君に戻し、次のように記す。

　大納言の君は、いとささやかに、小さしといふべきかたなる人の、白ううつくしげに、つぶつぶとこえたるが、うはべはいとそびやかに、髪、たけに三寸ばかりあまりたる裾つき、髪ざしなどぞ、すべて似るものなくこまかにうつくしき。顔もいとらうらうしく、もてなしなど、らうたげになよびかなり。

直前の宰相の君記事第二文と同様に、身長、顔色、肉付き、髪の長さ、顔立ちという外見に加え雰囲気を内容として、寛弘六年正月三が日という時間に限定された内容ではない。三が日のことは既に宰相の君の記事以前に、装束描写として記してしまっている。『日記』は、そこでは記さなかっ

た大納言の君の常よりの様子を記し、批評している。そしてこれに続くのが、宣旨の君の記事である。

宣旨の君は、ささやけ人の、いとほそやかにそびえて、髪のすぢこまかにきよらにて、生ひさがりの末より一尺ばかりあまり給へり。いと心はづかしげに、きはもなくあてなるさまし給へり。物よりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるる心地す。あてなる人はかうこそあらめと、心ざまものうちのたまへるもおぼゆ。

書かれる要素は宰相の君・大納言の君と同様で、先の二者に倣っていると見られる。だが問題は、宰相の君と大納言の君が寛弘六年正月三が日行事で特別な役割をあてがわれていたのに対して、宣旨の君にはそうした役割が記されていないことである。宣旨の君の記事は、寛弘六年正月三が日の箇所に記されるべき必然性を欠いている。別の言い方をすれば、『紫式部日記』はこの時、時系列の束縛から離陸している。

このついでに、人のかたちを語り聞こえさせば、物言ひさがなくやはべるべき。

は、この後に置かれる。「このついでに」は「宰相の君以下、女房の容姿批評をしてきた、そのついでに、の意」[9]であり、さらに言葉を補えば、「正月三日の宰相の君を記す記事の末尾に始まって、時系列にしたがう記録からだんだん筆が離れ、記録とは別の批評を書いてしまっているが、そのついでに」ということである。前半記録体と消息体の文脈は連続している。二つは、一体のものとして書かれたと考えざるを得ない。

2　前半記録体との相反

ところが、ここで大きな矛盾が発生する。それは、移行部の文脈においては前半記録体と連続している消息体が、内容の性格、特に公開性と秘匿性という点においては相反しているということである。前半記録体は、前に確認したように、彰子の出産という慶事を中心に置き、主家賛美の意図が明らかである。その意味では、現実に公開されたか否かはさておき、主家あるいは主家を通じて世間一般に読まれることを前提として書かれていると言ってよい。だがそれに対し、消息体は不特定多数の人々に読まれてはならない部分を幾つも持っている。

例えば、彰子後宮の消極的気風に触れ

上臈・中臈のほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみ侍るめる。さのみして、宮の御ため、ものの飾りにはあらず、見苦しとも見侍り。

という箇所などは、たとえ事実であろうと当の上臈・中臈

に対しては無礼な発言に違いない。また、紫式部が「惚け痴れ」を演じていたがために、同僚から「おいらか」、おっとりした人物だと評価されたという箇所に至っては、実はその「惚け痴れ」が、当初は

むつかしと思ひて、惚け痴れたる人にいとどなりはてて侍れば

のように、うるさ型の同僚が面倒なので無視を決め込もうとしての演技だったという事実、さらにその際の、

ことにいとしも物のかたがた得たる人は難し。ただ、わが心の立てつる筋をとらへて、人をば無きになすなめり。

のような、うるさ型女房たちの本質を突く鋭い洞察などは、決して当人たちには見せられない。紫式部は同僚たちとのこの一件を通じ、人間関係に角を立てない「おいらか」の気性を体得すべく励んだと記しているが、これを読まれれば、努力は瞬時にして無に帰してしまう。

また中宮への漢文進講の話題で、紫式部は自分に悪意を抱く左衛門内侍に言及し

まことにかう読ませ給ひなどすること、はたかのもの言ひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしり侍らむものと、すべて世の中、ことわざしげく、憂きものに侍りけり。

と記しているが、このように「内侍に知られたら面倒だ」などと書けるのは、進講の情報がこの文章を通じて左衛門内侍に漏れることはない、つまりこれが彼女に読まれることはないという前提に立っているからである。すなわち、消息体は不特定多数の読者の目に触れることを意図せずに書かれている。

このことから、「書簡体仮託説」の中では「作者は自己の内部の、自己のもっとも理想的な理解者である他者に向って語りかけているのではないだろうか」[10]或いは「読ませるべき相手は（中略）誰れでもありえなかったのである。ただ書きたいがために、まさしく文字通りの筆のまにまに随筆したものである」[11]との理解が生まれもした。『紫式部日記』は完全非公開の文章だったとの理解である。だが、それでは前半記録体の公的性格が説明できない。一方で、「書簡体仮託説」の諸説には必ずしも完全非公開と考えないものもあるが、それらは公開により紫式部の立場が危うくなることへの、現実的な説得力に欠ける。

3　二段階成立の可能性

現行の前半記録体と消息体は一体のものである。しかしその公開性と秘匿性は相反する。ならば、前半記録体が一旦単独で書かれた後、姿勢を変えて、一般への非公開を前

提に消息体が書き継がれたと考えてはどうか。

この見解に立つのが、現在「添え手紙説」[12]を採る諸説である。例えば原田敦子氏は、前半記録体はひとまとまりの慶事記録で主家の為に書かれた、その後紫式部がそれを主家とは別に知人のために書いて送ろうとした時「添え手紙」を付けた、それが消息体だと考えられた。原田氏はその場面を「（紫式部は）宰相の君の装束を叙した後、ふと筆を走らせて彼女の容姿を描写した。（中略）この小さな逸脱が次には大納言の君、宣旨の君の容姿批評へと発展し、遂には中宮附の女房の批評をまとめて行うところにまで、飛躍的な成長をとげたのである」[13]と推測される。消息文が前半記録体と連続しているのは、連続したものとして紫式部が書いてしまったからであり、しかし内容が秘密に満ちているのは、特定の誰かだけに向けて、非公開を前提に書いたものだからとされていて、共に納得できる。

稿者は、消息体を「手紙」とは考えない。消息体には、その末尾の挨拶文に「御文にえ書き続け侍らぬことを、よきもあしきも、世にあること身の上の憂へにても、残らず聞こえさせおかまほしう侍るぞかし。」とあるからである。「御文（消息）」には書けないことを書いたというからには、紫式部はこれを手紙と考えていない。だが、それは消息体が手紙として機能したことを否定するものではない。ことに、同じ「添え手紙説」を採る田渕句美子氏は、消息体を『阿仏の文』に類似する、娘への指南書と考えられている[14]。そうした観点を本稿は、後に述べるように非常に有効と見ている。ただ、紫式部はこれを「手紙」と認識していないと考えるだけである。それとは別に、本稿が問題とする成立事情という点においては、「添え手紙説」は強い説得性を持つ。

この説は、つとに増田繁夫氏によっても提出されていた[15]。氏は、紫式部は最初に「中宮御産記とでもいうべき記録、あるいは女房日記を書いたことがあった」、その後頼まれて「知人に中宮御産やそれをめぐる女房たちの生活を知らせる、いわば「後宮通信」といった形」のものを書いた、そしてそれに添えて「べつに消息、あの消息文的部分を書いて一緒にやった」とされる。前半記録体自体が二度にわたり二種類書かれた、そして後発のものに消息（消息体）が付けられたという見方である。

本稿も、考察の結果類似の見解に達した。本稿は、『紫式部日記』は当初「女房日記」的な色彩の濃い「献上本」が作られ、後にそれを大幅に書き換えて「私家本」が作られた、その際に消息体等が付加されたと想像する。こう仮定することで、『紫式部日記』の構成・主題・首欠の問題が一体的に説明できると考えるからである。

三　主家賛美と自己語りの問題

1　書き換えがもたらした二重主題

先に、前半記録体が「女房日記」的であり公的性格を有することを確認したが、それは必ずしも網羅的に言えることではなかった。前半記録体には憂愁叙述と呼ばれる異質な部分が点在していた。そこには、主家繁栄の記事の明るさに対して、暗く物思いにふける紫式部が描かれている。色調の大きな違いに、読む者は違和感を抱かずにいられない。

その違和感を解決する手立てとして、様々の論が試みられてきた。そうした中で一部有効と考えられるものに「作者の愁いにみちた心の描写は、作者の目と心を位置づけると共に、中宮や儀式の立派さを引き立てる役割をもったもの」[16]との説明がある。例えば、冒頭に続く中宮の初登場場面にある憂愁叙述、

憂き世の慰めには、かかる御前をこそ尋ね参るべかりけれと、現し心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

は、「中宮の立派さにひかれて、この世を憂き世と嘆く日頃の気持が、我ながら不思議に思えるほど、すっかり消えてしまう」[17]という中宮賛美だとされるのである。本稿でも、この箇所について、既に前半記録体の性格説明の際に触れた。そこでは、人生の苦を抱えながらそれをさりげなく隠す彰子が、同じように人生の苦を抱え持つ紫式部に共感と尊敬の念を抱かせたと考えた。主家賛美には様々のレベルのものがあるが、紫式部はその一つとして、まず自己を憂い多き存在と措定し、そんな自己に心の救済を与えてくれる主家を賛美するという方法を持っていた。憂愁叙述の憂いに満ちた自己像には、確かにこうした方法のために必然的に書かれたものも多いに違いない。

だがそれは、すべての憂愁叙述について言えることではない。中には、主家賛美につながるとは思えない憂いや、書かずもがなの事柄が記されることもある。例えば十月中旬、道長から具平親王家との懇意を頼られ、相談をもちかけられて「まことに心の内は思ひゐたること多かり」と気を重くする記述は、道長に読まれても無礼にあたらないのか。十一月十七日、内裏への還御に随行の際、同車となった同僚女房馬の中将から不快がられる場面は、当の馬の中将に読まれてしまっては、女房内で角が立つのではないか。十一月二十二日の「童女御覧」で、童女を見ながらわが身に思いが移り「かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは」と、宮仕えに馴致した自分を嫌悪し、将来を想像して暗澹

とする場面は、女房としてあまりに後ろ向きではないか。五節期間中、弘徽殿女御のかつての女房で臨時に手伝いのため参上していた左京馬を同僚と共にいじめる場面は、悪意に満ちており、彰子女房集団のイメージを落とすことになりはしないか。

これらの場面は、女房勤めに消極的で時にはそれに嫌悪感さえ抱いている紫式部や、同僚や他集団の女房との間で摩擦や確執を引き起こす紫式部を映し出す。そうした紫式部像は、研究者が紫式部という人間の内面を知るには貴重であった。だがこれが、紫式部自身によって主家に報告すべきものであったかというと、強い疑問を感じずにいられない。これらはあまりにも私的な情報でありすぎる。その意味で、主家という公を志向する「女房日記」の性格にはそぐわない。

ならばそれら、憂愁叙述の中でも主家への献上に適さぬものを、「女房日記」と分けて考えてはどうか。つまりそれらの憂愁叙述は、「女房日記」的である「献上本」には当初書かれなかったものであり、「私家本」への書き換えの際に付加されたものと考えてはどうか。「献上本」は主家賛美を主題として書かれ、一旦完成して献上された。だがその後、紫式部は「献上本」の控に大幅な修正や加筆を施して「私家本」を作成した。それは自己語りを主題として、主家の華やかさの一方で、憂いに満ちた自己を示すというものであった。修正の筆が寛弘六年正月に及んだ時、文章は記録を離れ、消息体が書き加えられた。現行『紫式部日記』はこの「私家本」を原形とする。現行の前半記録体に主家賛美という主題が確認できるのはもとの「献上本」からの産物であり、同様に自己語りという主題が見られるのは「私家本」への書き変えの結果であるとの憶測である。

2　現行冒頭以前の部分

このように「私家本」への書き換えということを考えると、首欠説についても説明が付きそうである。『紫式部日記』の外部資料は、日記に現行冒頭以前の部分、少なくとも寛弘五年五月の記事があったことを示唆していた。その記事は「私家本」への書き換えの際付加されたものと考えるのである。

現行の『紫式部日記』からは散逸しているこの記事を、最も原形に近く、まとまった形で見ることができるのは、前掲の外部資料B、『紫式部集』古本系諸本付載の後人作資料「日記歌」においてである。

三十講の五巻、五月五日なり。今日しもあたりつらむ提婆品を思ふに、阿私仙よりも、この殿の御

ためにや、木の実もひろひおかせけむと、思ひやられて

1妙なりや今日は五月の五日とていつつの巻にあへる御法も

池の水の、ただこの下に、かがり火にみあかしの光りあひて、昼よりもさやかなるを見、思ふこと少なくは、をかしうもありぬべきをりかなと、かたはしうち思ひめぐらすにも、まづぞ涙ぐまれける

2かがり火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ

おほやけごとに言ひまぎらはすを、大納言の君

3澄める池の底まで照らすかがり火にまばゆきまでもうきわが身かな

五月五日、もろともに眺めあかして、あかうなれば入りぬ。いと長き根を包みてさし出でたまへり。

小少将の君

4なべて世のうきになかるるあやめ草今日までかかるねはいかが見る

返し

5なにごととあやめはわかで今日もなほたもとにあまるねこそ絶えせね

藤原道長家では毎年五月に法華講を催していたが、寛弘五年はその第五巻の講義日が五月五日にあたっていた。第五巻には「提婆達多品」があり、釈迦が阿私仙（提婆達多）に奉仕して法華経を得た経緯が説かれて、最も尊ばれた。「薪の行道」と呼ばれる、参会者が「法華経を我が得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」という歌を唱えつつ、釈迦の奉仕の仕草を真似て水桶を持ち薪を背負って廻る行道も、この日に行われた[18]。1はその盛会の様子を称える。だが2では、紫式部の思いは明るいかがり火を見るうちに内向し「思ふこと少なくは、をかしうもありぬべきをりかな」と、わが身の負う苦悩の多さに涙する。

主家の晴の儀式に参加しながら、ふとしたことから思いがわが身の苦に向ってしまうことは、『紫式部日記』前半記録体の憂愁叙述にしばしば記されることであった。目前の華やかさにつけて逆に気分が暗く落ち込んでしまうことも、例えば行幸前、土御門殿の菊の園を見ての場面で

めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、もの憂く、思はずに、嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。

と述べられていた。2の詞書はそうした心理状況と同類である。

さて、紫式部は苦悩をこらえて2の歌を詠み、涙を「お

ほやけごとに言ひまぎらは」した。主家を賛美する感動の涙のようにごまかしたのである。ところが大納言の君は3のように詠み返した。それは主家の繁栄を象徴する「かがり火」の明るさに照らされつつ、それを「まばゆき」、いたたまれぬと感じてしまう「憂き」自分を詠んでいて、まさしく紫式部の本音そのものであった。

実は「日記歌」にはまた別の資料がある。『紫式部集』定家本系統の本文部分[19]にあって、後人によって挿入されたと考えられている一部分[20]である。「日記歌」同様に『紫式部日記』寛弘五年五月五日記事に依拠しているらしく、しかし「日記歌」制作者とは違う後人の手によって『紫式部日記』から切り出され、『紫式部集』に書き込まれたと思しい。そこでは3の詞書は「日記歌」よりずっと詳しい。

おほやけごとに言ひ紛らはすを、向ひ給へる人は、さしも思ふこともし給ふまじきかたち、ありさま、よはひの程を、いたう心深げに思ひ乱れて

これによれば紫式部は、容貌やたたずまいや年齢などのみから判ずれば苦労知らずとも見える大納言の君の、悩める心を知ったのだった。

「日記歌」とこの『紫式部集』定家本後人挿入部分とは、作者より後代の二者が二様に『紫式部日記』に依拠し制作したもので、右のように本文が全く違っている。したがって、原典の本文を確認するという意味では、どちらも信頼しがたい。だがこれらを用いて『紫式部日記』五月記事のおおまかな内容を透かし見る限りにおいては、十分に役に立つ。本稿が確認したいのは、二者が依拠した『紫式部日記』寛弘五年五月五日記事が、いわゆる憂愁叙述の典型ともいえるものだということである。4と5の贈答でも、小少将の君はあやめの根を紫式部に贈って「なべて世の憂きに泣かるるあやめ草」と、世の憂さに涙の絶えない自分を示し、いっぽう紫式部も「袂に余る音こそ絶えせね」と、絶えない号泣の涙が袂に余る自分を示している。こうした贈答は、現行日記の行幸前に菊の園を見て憂鬱な気分に引きこまれる憂愁叙述の中にも、内裏還御直前に古びた自宅で初雪を見、里居時代とは変わってしまった自分を痛感する憂愁叙述の中にもあった。

五月五日の記事も、主家の華やぎの傍らで苦悩に沈みこむ自己や女房達を記すものとして、「私家本」への書き換えの才に付加されたものと考える。やがて「私家本」『紫式部日記』が流布[21]してのち、損傷を受けたか、或いは暗鬱な内容に違和感が抱かれたなどといった理由により巻頭部分が脱落、その後の書写過程において、いかにも作品冒頭にふさわしい現行冒頭が巻頭とされたのだろう。それが現在通行する『紫式部日記』の祖本だと考える。

四　「私家本」の制作

1　制作の意味

ここまで、『紫式部日記』が二段階を経て成立した可能性について考えてきた。それは『紫式部日記』の原初を「女房日記」である「献上本」と見る視点に立ち、それに相反する秘匿性を持った消息体、またそれに貢献しない私的性格を持った憂愁叙述の一部は、性格が違うものとして、「私家本」への書き換えの際に付加されたとみなす考え方であった。だがそれにしても紫式部にとって、『紫式部日記』「献上本」を書き換え「私家本」を制作することには、どのような意味があったのだろう。

問題とする憂愁叙述と消息体とは、「女房日記」的でないということにおいては同様だが、明らかに方向性が違う。前者は個である〈私〉に内向するが、後者は女房たるものいかにあるべきかを述べていて、〈公〉つまり仕事志向である。

例えば消息体の開始後まもなく、斎院の女房「中将の君」の、斎院を賛美する手紙を話題にしては、「わがかたざまのことをさしもいはば、斎院より出で来たる歌の、優れて良しと見ゆるもことに侍らず」と彰子方女房の立場から対抗心を露わにし、「さぶらふ人を比べていどまむには、この見給ふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを」と両者の差は人ではなく仕事場の環境の差によると主張して、彰子方をかばう。一方で中宮女房達の消極性に触れる箇所では、前述のように「上臈・中臈のほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみ侍るめる。」と同僚の勤務態度を鋭く批判し「ただおほかたを、いとかく情なからずもがなと見侍り。」と歯がゆがる。全体を通じて消息体は、彰子女房集団の現状を見つめ、その改善を訴え、またその中で自己の才能をいかに穏便に発揮すべきかを熱く語る、彰子女房のあり方提言である。憂愁叙述と消息体の間の、この方向性の差は何か。

第一に、前半記録体は寛弘五年時点の紫式部を記している。いっぽう消息体には、執筆現在である寛弘七年[22]時点の紫式部の姿勢や意見が記されている。憂愁叙述の紫式部が女房勤めへの意欲を欠き、消息体では一転して意欲的であるのは、二年の歳月がもたらした成長と考えることができる。

第二に、消息体末の挨拶文は次のように記している。

御文にえ書き続け侍らぬことを、よきもあしきも、世にあること身の上の憂へにても、残らず聞こえさせおかまほしう侍るぞかし。

常の手紙には到底書けないことを書いたという。文飾ではあるまい。紫式部は前半記録体に、宮仕えは「おほぞう」なので、女房になった自分は「文や散らすらむ」と友から疑われているに違いないと記している。また消息体では、紫式部自身が斎院の中将の手紙を盗み読みしている。女房社会では、手紙はたやすく人に漏れるものであった。だが紫式部はこの文章が、絶対に秘匿すべきものであり、その意味で通常の手紙として書き送れるものなどでは到底ないことを熟知していた。そしてその内容とは、「よきもあしきも、世にあること身の上の憂へにても」であった。

紫式部自身の感じる、良いこと悪いこと、女房社会にあってのこと、また身の上のつらさについて、残らず伝えたい。本稿は、これを「私家本」書き換えの意味と考える。この挨拶文は、書き連ねてきた「私家本」の跋文なのだろう。主家を主役とした「献上本」から「私家本」へ、縷々書き連ね、最後にその読者に向けて、自分の本意を明らかにしたのだ。誇れる自分も嫌な自分も、女房である自分も〈私〉である自分も、皆伝えたい。だからこそ「私家本」は、怠惰なほど勤めを嫌悪する紫式部をも、将来への不安をも、同僚女房の意地の悪い仕打ちをも、同僚に乗せられて加担してしまったいじめをも記していた。また同僚集団への批判も、清少納言への呪詛にも似たこきおろしも、記していた。「私家本」『紫式部日記』とは、言わば紫式部の「うちあけ話」だったのである。

2 「私家本」の読者

こうした「うちあけ話」である「私家本」は、紫式部が自分だけのために制作し誰にも秘めていたものと考えることもできる。それはいかにも文学的な方法であり、『源氏物語』作家紫式部にふさわしいとも感じられる。だがここに、看過できない別の現実がある。紫式部がこの「私家本」を制作したまさにその時期に、「私家本」の内容を強く必要としていた人物が、紫式部の身近に存在した。紫式部の娘、賢子である。

前に触れたように、読者賢子説はすでに田渕句美子氏によって唱えられている。またつとに萩谷朴氏も、『紫式部日記』を賢子への女房指南書と考えられた。[23] 賢子は西暦九九九年か一〇〇〇年の生まれと推定され、「私家本」成立の寛弘七（一〇一〇）年には十一歳か十二歳、女性としての成人を目前にした時期である。大人となった娘は、どう生きるのか。彰子への出仕ということが、最も可能性の高い選択肢であったろう。『紫式部日記』によれば、この頃の紫式部は彰子付き女房内で十指に入る地位を占めていた。[24] また『源氏物語』は、彰子はもちろん藤原道長や一条天皇、

藤原公任にも読まれ、人気を博していた。そうした、女房として一定成功し信頼を持たれている母の娘であれば、彰子側も雇用に踏み切りやすい。他の例を見ても、女房には母と娘が同じ主家に勤める、累代の女房が少なくない。賢子の側にしてみれば、父がつとに亡くなっていることも出仕の理由になっただろう。[25] 結局、賢子はこののち程なくして、彰子付き女房の一員として長い女房生活のスタートを切ることになるのである。

こうした賢子のために、娘がまさに飛び込もうとしている世界の実際を、知る限りつぶさに伝える。紫式部が母としてそれを思い立つのは、ごく自然なことであっただろう。消息体が女房の個人情報を詳細に記し、批評していたのはそのためではなかったか。また、紫式部は里の女から抜擢されて女房になった。その分当初は、自身の心内にも彰子女房との間にも齟齬があって、慣れるには模索が必要であった。賢子にはそうしたことはないだろうが、同じ道を歩む娘に、自分の苦労を知ってほしい。それもまた、親として自然な思いであろう。娘だからこそ、多くを説明しなくても、母の憂いは分かる。その憂いを抱えつつ女房社会にどうなじんでいったか、試行錯誤や失敗も含めて、この機会に伝えたかった、それが私的な憂愁叙述を記した理由ではなかったか。そして何よりも、女房としての生き方である。「献上本」由来の前半記録体に明らかな、主家の現在の政治的状況。消息体に記される、彰子女房が受けている世評や抱えている課題。その中で一女房として、同僚に嫌われず能力を発揮する方法。これこそ、母が娘に伝えたい教えであったろう。

紫式部は基本的に彰子と共に居住し、賢子とは住まいが別なので、こうしたことをこんこんと話して聞かせる機会に乏しい。また、話語に比べて、書かれた言葉の力は強い。中でも特に語りかけの文体は、心情を相手に深く伝えうる。こうした理由から、娘のために「献上本」控を「私家本」に書き直し、消息体部分は話し言葉で書き添えたものと考える。

なお、本稿では触れることができないが、稿者は現行本の年次不明部分・後半記録体についても、書き換えの際に付記として「私家本」に添えられたものと考えている。つまり「私家本」は現行『紫式部日記』に寛弘五年五月五日記事等の首部が付いたものだったと想像する。現行『紫式部日記』よりもさらに雑多で、まとまりを欠くことは否めない。が、それは「私家本」の主眼が、作品としての完成度よりも情報としての充実度にあったためと考える。ならば「私家本」制作とは、母として娘への思いがなす、文学よりも情念の行為だったと言えるのではないか。

文中の本文は次の本による。なお、私に漢字をあてるなど、表記を変えた箇所がある。

『紫式部日記』…角川ソフィア文庫『紫式部日記（現代語訳付き）』／『紫式部集』古本系・定家本系…新潮日本古典集成『紫式部日記　紫式部集』／『古今和歌集』…新日本古典文学大系

注

（1）実際の手紙が混入したものとする「竄入説」に藤村潔氏『源氏学序説』（笠間書院、1987年）等。それに対し、手紙文の形に仮託して書いたとする「書簡体仮託説」説に秋山虔氏日本古典文学大系『紫式部日記』解説（岩波書店、1958年）等がある。また実際の手紙ではあるが記録体に引き続いて書かれた「添え手紙」であるとの説に増田繁夫氏「紫式部日記の形態―成立と消息文の問題―」（『言語と文芸』68、1970年）等がある。

（2）萩谷朴氏『紫式部日記全注釈上・下』角川書店、1973年・室伏信助氏「紫式部日記の表現機構―「十一日の暁」をめぐって―」（『国語と国文学』1987年11月）等

（3）石村正二氏「紫式部日記の原形と現存形態（上）―その首欠部分について―」（『国語』4巻1号、1955年8月）

（4）「女房日記」については、宮崎荘平氏『平安女流日記文学の研究　続編』（笠間書院、1980年）Ⅰ総説篇　第四「女房日記の形成とその展開」。

（5）角川ソフィア文庫、2010年。

（6）拙著『ビギナーズ・クラシクス日本の古典　紫式部日記』（角川ソフィア文庫、2009年）および注（5）『紫式部日記』当該部分解説・脚注・補注

（7）山本淳子「彰子賛美の真情―『紫式部日記』寛弘五年秋―」（『中古文学』75、2005年5月）

（8）九月十五日、道長主催の五日の産養記事で、皇子誕生について「語らふべかめる」と推量されている。

（9）宮崎荘平氏『紫式部日記　下』（講談社学術文庫、2002年）当該箇所語釈

（10）注1の秋山虔氏解説

（11）曾沢太吉・森重敏両氏『紫式部日記新釈』（武蔵野書院、1964年）「解題に代えて―いわゆる消息文の問題―」

（12）「添え手紙説」は一般には「竄入説」の一種とされるが、本編とは無関係な手紙が「紛れ込んだ」との認識ではない点から、本稿は「竄入説」とは別のものと扱う。

（13）『紫式部日記　紫式部集論考』（笠間書院、2006年）第一部第一章第五節「消息文の成立筆」

（14）「『紫式部日記』消息部分再考―『阿仏の文』から―」（『国語と国文学』2008年12月）

（15）注1の増田氏論文。

（16）山本利達氏、新潮日本古典集成『紫式部日記　紫式部集』解説（新潮社、1980年）

（17）注16山本氏解説

（18）この行道の様子を、道長は「池頭を廻るに立ち加はる人・僧、一四三人」（『御堂関白記』同日）と記している。

（19）定家本（実践女子大本）歌番号65～71。

（20）清水好子氏「紫式部集の編者」（『国文学』46号、197

2年3月、関西大学）

(21) 外部資料『明月記』「日記歌」「『紫式部集』定家本後人挿入部分」はこれに依拠している。『紫式部日記』と成立年代が近い『栄華物語』（巻八）との関係については注6拙著参照。

(22) 消息体中で大江匡衡が「丹波の守」と記されることから、匡衡が丹波の守に遷任された寛弘七年三月三十日以降の執筆と知られる。執筆の下限は一条天皇が発病し、退位が決定した寛弘八年五月である。消息体の中には「風の涼しき夕暮」など、夏から秋にかけてを思わせる記述があり、総合して寛弘七年夏か秋頃の執筆とする説が有力である。

(23) 注2萩谷朴氏注釈書

(24) 『紫式部日記』寛弘五年十一月十七日、内裏還御場面での乗車順から推定する。

(25) 賢子は成人前から童女として彰子に出仕していた可能性も否定できないが、その資料は今のところ見いだせない。